つつじ野

こんな人もいます

「おはようございます。これからアナグマの巣穴に行ってきます」。駐車場から研究室へ向かう途中、ジャージー姿の3人の学生とすれ違う。研究室に入ると、眠そうな顔をした2人の学生が朝食のスープ麺をすすっている。「先生、捕れませんでした～」。夜通しネズミの調査をしていたのだ。

これは東京農大野生動物学研究室（野動研）の日常である。野動研には全国から生き物好きが集まってくる。高校では変人扱いされてきた者たちが、大学で同志と出会い、切磋琢磨する。私はそんな学生たちと、国内外のフィールドで野生動物の生態（生きざま）を明らかにして、保全や管理に応用することを目指している。

私は東松島で育った。12年の大学生活は東京、さらには東南アジア・ボルネオ島（フィリピンの下にある世界で3番目に大きな島）の熱帯雨林で過ごした。大学を出た後は、ボルネオでのプロジェクトの契約研究員（8年）や現地の大学で教員生活（3年）を送り、今の仕事に就いたのは41歳の時である。ちょっと変わった人だという自覚はある。

そんな私が、3年前から東松島で、小学生対象の生き物を通した体験学習プログラムに参加する機会に恵まれた。この夏は子供たちとボルネオの熱帯雨林を歩いてきた。保護者と離れて初めての海外生活でも、目を輝かせ生き生きとしていたのがとても印象に残っている。

野動研の学生たちやプログラムに参加した子供たち同様、私も生き物が好きな若者だった。しかし好きなことで飯を食うことはなかなか難しく、これまでの人生は綱渡りの連続。続けられたのは、特技のポジティブ思考に加え、温かい手を差し伸べてくれた人たちのおかげである。本コラムでは、「こんな人もいます」という多様な生き方の一つを紹介したい。

（松林尚志）

まつばやし・ひさしさん　東京農大教授。1972年1月、石巻市生まれ。東松島市赤井小、同市矢本二中、石巻高卒。東京農大に進学、東京工大大学院を修了。2016年10月から現職。生き物好きの学生が集う野生動物学研究室で教べんを取る。趣味は生き物観察。神奈川県厚木市。

2024年12月7日付 三陸河北新報社「石巻かほく」掲載（使用許諾済）

つつじ野

熱帯雨林に憧れる

私の生き物好きは、幼稚園時代にまでさかのぼる。キッカケは「クワガタ」だった。友達が立派なノコギリクワガタを見せてくれたのである。そこから昆虫好きになり、図鑑にハマり、捕まえに行くようになり、生き物がいる環境も好きになっていった。

最近の生き物好きの若者は、いつごろ目覚めたのだろうか。野生動物生態学を履修する「生き物が好き」という学生249人に聞いてみたところ、89%が幼稚園（60%）・小学校（29%）の頃で私と変わらなかった。改めて、この時期に受ける影響は大きく、いかに大事であるかが分かる。

そんなピュアな小学生の頃、フィリピンやボルネオへ南洋材（東南アジアの木材）の買い付けに行っていた伯父から、現地の森や生き物の話を聞いた。それは図鑑でしか知らない私にとって衝撃的で、熱帯雨林は憧れの場所になった。

中学生になると、動物雑誌『アニマ』（平凡社）を愛読する。お気に入りは「冒険と生物学」という特集。熱帯雨林から氷河まで、地球規模でフィールドワークをする研究者の姿が紹介されていた。熱帯雨林の30㍍を超える高い林冠（林の上部分）は未知の世界で、そこにロープを使って迫る研究者はひときわ魅力的だった。

高校時代は授業中も読書に励む劣等生。勉強しないのに、偏差値偏重の受験競争から解放されたいという気持ちだけは強かった。唯一の救いは生物部の部活動。部誌を復刊したり、金華山をはじめ周辺の島々へ生き物観察に行ったりした。

ただ高校生になると生き物好きを公言する者は激減するため、希少種のように好奇の目にさらされる。自分の居場所はどこか、何をすれば満たされるのか、ボンヤリして下ばかり見て歩いていた。しかし大学進学での上京が転機となり、好奇心と直感に従って自分の道を探し始めた。

（松林尚志　東京農大教授　神奈川県厚木市）

2024年12月14日付 三陸河北新報社「石巻かほく」掲載（使用許諾済）

つつじ野

鮎川で原点回帰

大学は自由である一方、自主性が求められる。私は好奇心の赴くままに、学部は東京農大・家畜生理学、大学院修士課程は東京工大・分子進化学と、大学・分野を変えながらDNA研究に没頭した。しかし生き物から離れていく自分に気付き、違和感を覚え始める。修士ではクジラの系統解析をしていたものの、肉片しか見たことがなかった。「実物を見てみたい」。水産庁の加藤秀弘先生に相談すると、石巻市鮎川地区での沿岸小型捕鯨生物調査員のアルバイトを紹介してもらった。

1996年、夏のツチクジラと秋のコビレゴンドウの計測や試料の採取をする調査に参加した。捕れないときは何もせずに一日が終わるが、12頭捕れたときは夕方から翌朝まで休みなく作業した。作業後に飲みながら頂いた刺し身は絶品で、解体夫のおじさんが話す非日常的な体験談は面白かった。自分が本当にやりたいことが徐々に見え始めてくる。2カ月の滞在を終える頃、将来の方向性は、憧れだった熱帯雨林での動物生態学へと変わっていた。

博士課程から分野を変更しての受け入れ先はなかなか見つからず、無謀だと説教されるのが落ちだった。そんなある日、同じ大学に変わった先生を見つける。氷河生態系という新しい生態系の発見者・幸島司郎先生だ。先生は定職に就く前、アマゾンの林冠プロジェクトに参加した際に見つけたという良書の翻訳本『熱帯雨林の生態学』（どうぶつ舎）を出していた。

話だけでも聞いてもらおうと会いに行き、経緯と希望を控えめに伝えた。すると意外にも「おもろそやな」と身を乗り出し「自力でやるなら」と受け入れてくれた。しばらくして中学時代に愛読していた動物雑誌『アニマ』を見返してあることに気付く。「特集・冒険と生物学」の1面を飾る氷河に立つ後ろ姿の人物は幸島先生ではないか。

（松林尚志　東京農大教授　神奈川県厚木市）

2024年12月21日付 三陸河北新報社「石巻かほく」掲載（使用許諾済）

つつじ野

いざボルネオへ！

多くの人に無謀だと言われた、博士課程からの熱帯雨林での野生動物生態研究。研究対象に選んだのは「マメジカ」だった。東南アジアの熱帯雨林に生息するヒメマメジカは、世界最小の反すう動物である。体重は2キロほどでパッチリお目目。丸餅に棒を4本突き刺したようなかわいらしく、きゃしゃな姿だ。私はその生態を調べることで「なぜ小さいのか？」「なぜ生き残れたのか？」を明らかにしたいと考えた。

海外研究はプロジェクトに参加するのが一般的。しかしツテも実績もない私は相手にされず、結局『地球の歩き方』を片手に単身ボルネオのマレーシア領サバ州へと渡った。方法は単純。森林保護区の事務所窓口での直接交渉だ。紹介状もない作り笑いの日本人学生が唐突にたどたどしく英語の原稿を読み上げる。当然驚かれ、2カ所は断られた。しかし、3カ所目に訪ねたオランウータンをはじめとする野生動物の保護施設は違った。

生物局獣医師のエドウィンさんが「やってみなさい」とチャンスをくれたのである。「保護された」と思った。森に隣接する施設内の宿舎の一室を無料で貸してもらう。そこは、森に帰らないオランウータンがうろつき、鉄格子の窓越しに私を観察してくる非日常の世界。こうして1年の半分以上をボルネオで過ごす生活が始まった。調査は一進一退の繰り返し。マメジカが捕まらないと思ったらスタッフが食べていたという衝撃的な事件も経験する。「相手を信じ、待ち、許す」精神が養われた。

当時のボルネオ生活の詳細は拙著『熱帯アジア動物記』（東海大学出版会）を参照いただくとして、森の中にはマメジカが小さいからこそ利用できる隠れ家兼エサ場のあることが分かった。このような新知見をまとめ、博士課程5年半、トータル大学12年生で、晴れて博士号を取得することができた。

（松林尚志　東京農大教授　神奈川県厚木市）

2024年12月28日付 三陸河北新報社「石巻かほく」掲載（使用許諾済）

つつじ野

研究を保全につなげる

博士号は研究者の免許証。取得しても定職に就けるわけではない。当時、熱帯雨林でのプロジェクト研究は盛んだったものの「動物屋」がおらず、そこに契約研究員として滑り込んだ。私はマメジカの生態研究から、どんなに小さく頼りなくても、自分に適した環境さえ見いだせれば生き残れることを学んだ。ボルネオの人と自然にすっかり魅了されていた私は、お金をもらいながら研究できることに喜びを感じ、せっせとボルネオへ出稼ぎに出た。長い修業時代の始まりである。

博士課程では憧れの熱帯雨林を堪能した一方で、深刻な現実も見せつけられた。調査地の森に隣接する保護施設に、すみかを追われた野生動物が毎日のように運ばれてきたのである。原因は木材やアブラヤシプランテーション開発に伴う大規模な森林伐採。木材は合板や紙の原料、アブラヤシから採れるパーム油は食料品や化粧品をはじめ、身の回りのさまざまなものの原料となり、私たちの日々の生活を支えている。

私が参加したのは持続的な森林利用を検証するプロジェクトだった。課題以外にも何かしたいと思っていた時、森林局のピーターさんから「野生動物を考慮した森林管理とは？」と聞かれる。そこで浮かんだのが、ミネラル源「塩場（しおば）」だった。野生動物にも「塩」は必要不可欠。植物には少ないため、植物食の動物は積極的に塩を摂取する必要がある。

森の中の複数の塩場に、当時普及し始めた自動撮影カメラを設置して利用種を調べた。すると大型絶滅危惧種、特にオランウータンが頻繁に訪れていることが判明する。この結果を論文にし、それを根拠として森林局に塩場周辺の重点保護区化を提案したところ、翌年から森林管理計画に採用してもらえた。研究が野生動物保全につながり、やりがいを感じた。

（松林尚志　東京農大教授　神奈川県厚木市）

2025年1月4日付 三陸河北新報社「石巻かほく」掲載（使用許諾済）

つつじ野

ボルネオ教員生活

ボルネオへの出稼ぎは8年続いた。プロジェクトの最終年、37歳にして、これまでにない将来への不安が重くのしかかってきた。そんな時、マレーシア・サバ大学のホームページに「DNAも扱える動物屋」の公募を見つける。「これだ！」と直感して応募したところ、運よく准教授として採用された。修士課程までのDNA漬けの日々は、決して無駄ではなかったのだ。

大学の授業は120分。1年目こそ大変だったが、指導学生は毎年2人ほど。フィールドに出かける際は大学の専属ドライバーが運転する四駆車を使える。とても恵まれた環境だった。この利点を生かし、当時家畜ウシとの交雑が疑われていた希少な野生ウシ「バンテン」の調査を行った。州全域の分布とふんに含まれるDNAから交雑の有無を検証した。詳細は拙著「消えゆく熱帯雨林の野生動物」（化学同人）を参照いただくとして、結果は調査個体の全てが純血であることが判明。保全価値を高めることができ、州政府も本格的な保全対策に乗り出した。

NHKの自然動物番組「ダーウィンが来た！」と一緒に仕事をしたのもこの時。当時の自動撮影カメラは解像度が低いため個体識別ができず、一つの塩場にオランウータンが何頭来ているのか分からなかった。そこで番組ディレクターの小林夏生さんに協力を依頼した。1カ月ほどの撮影期間で、樹上性・単独生活者のオランウータンが18頭も現れるという驚きの事実が判明。この話は2012年「動物大集合！魔法の泉」として放送されている。その後再放送され、英語版も作られた。

この頃から仕事で声がかかり始め、母校の東京農大に就職が決まって今に至る。サバ大学には3年勤めた。ボルネオで教育に関われたことは大きく、教え子の中には、野生動物保全のリーダーとして活躍する者も出てきた。現地へ行く度に、皆で食事をするのが恒例となっている。

（松林尚志　東京農大教授　神奈川県厚木市）

2025年1月11日付 三陸河北新報社「石巻かほく」掲載（使用許諾済）

つつじ野

いきもの調査隊

２０１６年、東京で開催された高校の同窓会に参加した。同じテーブルにはポプラ社の千葉均社長。その時はあいさつ程度だった。そして3年後の19年、教え子がポプラ社に採用されたのをきっかけに連絡を取り再会する。「地元の子供たちに自然体験の機会を増やそう」と盛り上がった。さらに3年後の22年、古里東松島の矢本西小と母校・赤井小で、産学官連携の生き物を通じた体験学習プログラム「ポプラいきもの調査隊」が実現した。

調査地は東松島の滝山公園。展望台から市の東部・航空自衛隊松島基地、大曲浜、遠くは牡鹿半島を望むことができる。桜の名所として知られてはいるが、どんな生き物が生息しているのか、私を含め多くの人は知らなかった。当初は「何もいねっちゃ」と言われたほどだ。

事前調査として21年12月、小雪が舞う中、プログラム調整役・口笛書店の近江瞬さんと滝山にカメラを設置しに行った。そして年明けの3月、千葉さんも加わり再び訪れる。動画を見てビックリ。「おぉ！」と声を出すほど、カモシカをはじめ多くの動物たちの姿があった。まさに灯台下暗し。今こうしている間も、彼らは滝山でひっそりと暮らしているのである。

昨年からは、ポプラ社に代わって市内の一般社団法人東松島みらいとし機構が入り「東松島いきもの調査隊」として継続している。本年度は、夏の観察会、ボルネオ体験ツアー、そして秋の観察会を学生サポーターと共に実施した。

子供たちの生き物を見つけた時の目の輝きは素晴らしい。ボルネオではなおさら。みんな大汗をかきながら常に生き物を探していた。最終日は「帰りたくない」と言うほどハマり、マレー語も少し覚えた。好きな生き物を通して新しい世界を体験したことで、子供たちの中では、きっと何かすごいことが起きていたはずだ。

（松林尚志　東京農大教授　神奈川県厚木市）

2025年1月18日付 三陸河北新報社「石巻かほく」掲載（使用許諾済）

つつじ野

好きの力を信じる

「どんな大人になるのかなぁ」。生き物に目を輝かせる子どもたちを見ながら思う。私の親は、生き物への関心が強過ぎる私を見て心配した。国語の教員だった父は、私を生物の教員にすれば好きなことで飯が食えると考えたようだ。しかし期待は裏切られ、教員免許も取らず、挙げ句の果てにボルネオへ。当時は連絡もままならなかった。その後も定職に就かない私を見て、神経を擦り減らしたに違いない。それでも応援し続けてくれたことは、心から感謝している。

本コラムの最後に、ボルネオでの新しい取り組みについて紹介したい。そもそも「なぜ熱帯雨林は大事なのか?」。大きな視点では、気候変動を緩和する働きがあり、生物多様性（新薬の原料などの遺伝資源）の宝庫だからである。

これまで、ひどく伐採され荒れた熱帯雨林の回復策には、植林で緑を増やすことだけが注目され、生物多様性については軽視されがちだった。最近では、多くの野生動物の食物となるイチジクを植えたり、樹洞利用種のために巣箱を設置したりする方向へと変わりつつあるが、その有効性はよく分かっていない。また、生物多様性の評価方法の改善も求められている。

これらの課題に取り組むべく、昨年3月、ボルネオのサバ州森林局と東京農大は「野生動物を考慮した熱帯雨林再生に関する研究」の基本合意書を締結した。これも現場スタッフとの雑談が事の始まり。こうやって、しぶとく好きなことを続けている。

水木しげる著『水木サンの幸福論』（角川文庫）に「幸福の七カ条」というのがある。その一つ「好きの力を信じる」は、どんな状況に陥っても頑張れる力だ。人生一度きり。若者の皆さんには、あまり他人と比べず、周りに迷惑をかけない範囲で、自分に正直に生きることをオススメしたい。その過程で出会う人との関係を大切にすれば、おのずと道は拓けるだろう。

（松林尚志　東京農大教授　神奈川県厚木市）

2025年1月25日付 三陸河北新報社「石巻かほく」掲載（使用許諾済）